

ケチュア語アヤクーチョ方言の自他交替*

—心理動詞の両極性に着目して—

諸隈夕子

stellstellas@gmail.com

キーワード：ケチュア語 自他交替 心理動詞 再帰 使役 動詞意味論 言語類型論

要旨

本稿では、ケチュア語アヤクーチョ方言における自他交替の振る舞いを、心理動詞における刺激・経験者間の作用の双方向性に着目して記述する。Haspelmath (1993) による 31 の動詞対でアヤクーチョ方言の自他交替派生パターンを調査したところ、この言語は通言語的に見ても有指向性派生、特に使役型の派生パターンを好むことが明らかになった。さらに、使役型派生パターンを取る動詞と逆使役型派生パターンを取る動詞の分布は、Haspelmath (1993; 2016) が提案する動詞の「自発性」のスケールに概ね従っていることも明らかになった。一方で、心理動詞の自他交替に着目すると、アヤクーチョ方言では稀な両極派生型パターンを持つものが集中して見られる。これは、心理状態変化が「経験者から刺激への注意」と「刺激から経験者への影響」の双方向の力動性を同時に含意するという両極性 (Croft 2012) を持つからであると考えられる。

1. はじめに

ケチュア語アヤクーチョ方言 (以下「アヤクーチョ方言」) の動詞には、(1)(2) のように同じ動詞形態素を共有しつつ、形態的派生関係が見られる自動詞と他動詞のペアが観察される¹。

- (1) *urma-* / *urma-chi-*
drop *drop-CAUS*
'drop (intr.)' 'drop (tr.)'

* 本研究は、JSPS 科研費 JP 19H01264 の助成を受けたものである。また、本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(プロジェクトリーダー: 窪田晴夫)「動詞の意味構造」班(リーダー: 松本曜)および「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」(プロジェクトリーダー: プラシヤント・バルデシ)による成果の一部である。

¹ 本稿で用いる略号は以下の通り:

1: first person	2: second person	3: third person	ABL: ablative	ACC: accusative	
BECOME: state-change verbal derivation	CAUS: causative	COM: comitative	COMPL: completive		
DAT: dative	F: female	FOC: focus	HYS: hearsay	INF: infinitive	INST: instrumental
LOC: locative	NMLZ: nominalizer	NOM: nominative	PL: plural	PROG: progressive	
PST: past	REFL: reflexive	SG: single	TOP: topic		

- | | | |
|----------------|---|--------------|
| (2) paka-ku- | / | paka- |
| hide-REFL | | hide |
| ‘hide (intr.)’ | | ‘hide (tr.)’ |

このような自動詞 (非使役動詞)² と他動詞 (使役動詞) の形態的關係性は、いわゆる自他交替として、様々な言語で研究が進んでいる (Haspelmath 1993; Nichols et al. 2004 など)。自他交替とは、特に状態変化を表す動詞において、非使役 (自発的) 状態変化と使役状態変化の意味的派生関係と、動詞の形態的派生関係の対応が観察される現象である。例えば、(1) では非使役状態変化「落ちる」から使役状態変化「落とす」への派生関係が接尾辞 *-chi* によって、(2) では使役状態変化「隠す」から非使役状態変化「隠れる」への派生関係が接尾辞 *-ku* によって、それぞれ標示されている。

心理状態変化を表す動詞は、このような非使役状態変化と使役状態変化の形態統語的対応関係が広く着目されている領域である。心理動詞とは、心理状態を経験する経験者 (Experiencer) が主語として表される動詞 (*fear* など) と、心理状態の原因となる刺激 (Stimulus) が主語となる動詞 (*frighten* など) の大きく2種類に分けられる (Talmy 2000: 98)。例えば、(3) の *fear* は恐怖を感じる経験者である *I* が主語として実現しており、一方 (4) の *frighten* は恐怖を与える刺激である *that* が主語として実現している。

- (3) *I fear that.* (経験者が主語)

- (4) *That frightens me.* (刺激が主語)

このような心理動詞における項実現パターンのバリエーションは、「経験者が刺激に関心を向ける」という経験者から刺激への力動性と、「刺激が経験者の心理状態を変化させる」という刺激から経験者への力動性を併せ持つ心理状態変化の両極性に起因するとされる (Croft 2012: 233-236 など)。このような興味深い特性から、心理動詞は意味と形態・統語のインターフェースを探る上で注目されてきた。

本稿ではまず、アヤクーチョ方言の自他交替パターンを Haspelmath (1993) の枠組みに従って記述する。ケチュア語の自他交替研究においては、アヤクーチョ方言と系統的に近い方言であるクスコ方言のデータが Nichols et al. (2004) の類型論的研究で取り上げられている。本稿では Haspelmath (1993) のデータと聞き取り調査によって得られたアヤクーチョ方言のデータを比較し、この方言は通言語的に見ても有指向性派生、特に使役型の自他交替パターンを強く好む

² Haspelmath (1993) も指摘するように、非使役状態変化動詞は必ずしも一項動詞、つまり厳密な自動詞とは限らない。例えば、「自動詞」として挙げられる *learn* と、そのペアにあたる「他動詞」*teach* は、結合価の点ではどちらも2項動詞つまり他動詞である。

結合価の変化としての「自動詞」と「他動詞」の関係から、意味構造の変化としての「非使役 (自発的) 状態変化」と「使役状態変化」の関係を区別するため、本稿では非使役状態変化を表す (広義の) 自動詞を「非使役動詞」、使役状態変化を表す (広義の) 他動詞を「使役動詞」と呼ぶ。

傾向にあることを明らかにする。

さらに、アヤクーチョ方言の自他交替における派生の方向性は、Haspelmath (1993) が指摘する状態変化の自発性に基づく通言語的傾向に沿うことを指摘する。Haspelmath (1993) では、どのような動詞対が通言語的に使役型派生・逆使役型派生を取る傾向にあるかを観察した上で、「現実世界において、より非使役的事象として実現しやすい状態変化」つまり「自発性の高い状態変化」は、非使役状態変化がより無標な形態で表される、使役型の交替パターンを取る傾向があると指摘している。このように Haspelmath (1993) が指摘する「使役型を取りやすい動詞対」にはアヤクーチョ方言でも使役型派生が集中しており、使役型派生・逆使役型派生をめぐる通言語的傾向によく沿っている。

本項ではこのような動詞全体の傾向を記述した上で、アヤクーチョ方言では心理動詞の多くが例外的に両極派生型の派生パターンを持つことを明らかにする。そして、心理状態変化の特徴である、力動性の両極性 (Croft 2012) がこの特異な派生パターンの原因であることを論じる。動詞全体の傾向を踏まえた上で、心理動詞のような動詞の意味クラスに着目して自他交替を記述することにより、アヤクーチョ方言の動詞・接尾辞の語彙意味論的体系をより精密に明らかにできる。

ケチュア語は、広い意味領域をカバーする豊富な接尾辞を持つ、形態から見る意味の透明性が非常に高い言語である。このような言語での自他交替パターンの傾向・特徴を記述することにより、意味と形態・統語の対応関係を観察する上で、言語類型論的に興味深いケーススタディを提示することができる。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、アヤクーチョ方言の言語的特徴と状態変化表現を概観する。第3節では、自他交替研究における分析手法と主な議論を導入する。第4節では、Haspelmath (1993) が用いた31の自他動詞対を元に、アヤクーチョ方言の自他交替における形態的派生パターンを記述し、アヤクーチョ方言では使役型派生パターンが強く好まれること、使役型派生・逆使役型派生の分布に Haspelmath (1993) の指摘する自発性スケールによく沿うことを明らかにする。第5節では、アヤクーチョ方言の心理動詞の自他交替における派生パターンが例外的に両極派生型パターンを好むことを明らかにし、この特異性が心理状態変化の両極性に起因することを論じる。第6節は結語である。

2. ケチュア語アヤクーチョ方言について

2.1. アヤクーチョ方言の基本的情報

ケチュア語は、南米アンデス地方のペルー・ボリビア・エクアドルを中心に、現代では約800万人の話者を持つ先住民言語である。アヤクーチョ方言はケチュア語の中でもペルー南部のアヤクーチョ州・ワンカベリカ州・アプリマク州で用いられる、約90万人の話者を持つ一変種である³。現代の、特に市街地在住の話者の多くはスペイン語との流暢なバイリンガルであり、ス

³ 現代においてケチュア語の「方言」は独立した言語として扱うことが一般的だが、本稿では表記上の慣例に倣い「アヤクーチョ方言」と表記する。

ペイン語からの借用語彙も頻繁に用いられる。

ケチュア語全体に見られる大きな特徴は、豊富な接尾辞を用いた膠着的な形態統語法である。名詞・動詞をはじめ種々の品詞に接尾辞が接続し、名詞格・人称・数・テンス・アスペクト・モダリティ・情報構造など幅広い文法情報や派生的意味を表現する。動詞接尾辞はおおむね動詞語根-派生接尾辞-テンス-人称-屈折接尾辞の順で接続する(ただし、一部の接尾辞連続は例外的な順を取る)。例として (5) を挙げる。

(5) *chay-si* *yaya-qa* *pinqa-ku-y-lla-wan-ña* *yayku-ku-yku-n*
 that-HSY priest-TOP shame-REFL-NMLZ.INF-only-COM-COMPL enter-REFL-into-3SG

sacristia *uku-man-ña*

vestry inside-DAT-COMPL

‘Then the priest enter into the vestry just with shame’

(Hinostroza Ayala 2000)

(5) では、例えば動詞 *pinqa*-「辱める、非難する」に再帰接尾辞-*ku*、名詞(不定詞)化接尾辞-*y*、「のみ」を表すとりたて接尾辞-*lla*⁴、共格接尾辞-*wan*、完了アスペクト接尾辞-*ña* が接続している。アヤクーチョ方言にはこのように、名詞格をはじめとする文法機能を表す接尾辞の他、とりたての-*lla*、主題を表す-*qa*、伝聞を表す-*si* など語用論的機能を表す接尾辞も幅広く存在する。本稿の中心である自他交替に大きく関わる結合価の変化も接尾辞によって標示される。結合価操作の中でも代表的な使役接尾辞-*chi* (6) と再帰接尾辞-*ku* (7) による派生は非常に生産的であり、自他交替研究の主眼となる状態変化動詞に限らず用いられる。

(6) *Ñuqa-qa* *wallpa-man* *sara-ta* *miku-chi-ni*
 1SG-TOP chicken-DAT corn-ACC eat-CAUS-1SG

‘I make the chicken eat the corn’

(Zariquiey & Córdova 2008: 171)

(7) *Qam* *espejo-pi* *qawa-ku-rqa-nki*
 2SG mirror-LOC look-REFL-PST-2SG

‘You looked at yourself through the mirror’

(Zariquiey & Córdova 2008:170)

アラインメントは対格型であり、直接目的語は原則として⁵対格接尾辞-*ta* で標示する。基本語順は SOV であるが、語用論的要請に応じて SVO や OVS をはじめ異なる語順も比較的柔軟に認められる。

⁴ -*lla* の実際の意味領域はより広範であるが、本稿の趣旨からは逸脱するため、もっとも典型的な用例であるとりたてとして紹介する。

⁵ 名詞化従属節内ではゼロ標示- \emptyset で表示され得る。

2.2. アヤクーチョ方言の状態表現・状態変化表現

アヤクーチョ方言の述語は、<動詞>または<名詞・形容詞とコピュラ動詞>で表現される。ただし、主語が三人称単数かつ単純（進行相でない）現在形の場合、コピュラ動詞は省略される。

(8) 動詞述語

huk misi puñu-chka-n
one cat sleep-PROG-3SG
‘A cat is sleeping’

(9) 形容詞述語（コピュラ動詞有り）

chay misi-qa uchuy-mi ka-ra(-n⁶)
that cat-TOP small-FOC be-PST-3SG
‘That cat was small’

コピュラ動詞が省略される場合、(10) (11) のように述語は焦点接尾辞-*m(i)* または-*s(i)*⁷ で標示する。

(10) 形容詞述語（コピュラ動詞無し）

chay misi-qa uchuy-mi
that cat-TOP small-FOC
‘That cat is small’

(11) 名詞述語（コピュラ動詞無し、コピュラ動詞の振る舞いは形容詞述語に準ずる）

chay runa-qa doctor-mi
that man-TOP doctor-FOC
‘That man is a doctor’

なおアヤクーチョ方言において語彙的クラスとしての形容詞と名詞の間の区別は明確でなく、「大きい」「美しい」のように典型的には形容詞的に用いられる語が「大きさ」「美しさ」のように動詞の項として用いられることもあれば、「石」「人」のように典型的には名詞的に用いられる語が「石の」「人の」のように他の名詞を前置修飾することもある。名詞と形容詞をめぐるケチュア語の語彙的品詞クラスの区別には未だ議論があるものの、本稿では特別な要請が無い限りこれらを1つのクラス「名-形容詞」として扱うこととする。

アヤクーチョ方言の状態表現、つまり動作や変化ではなく「そのような状態であること」を

⁶ 過去テンスにおいて3人称単数の人称活用語尾は脱落し得る。

⁷ 証拠性により使い分ける。-*m(i)* は直接見聞きした内容の焦点、-*s(i)* は伝聞の内容の焦点を表す。

表す表現は、主に (8)(9)(10)(11) のように名-形容詞で表されるか、(12) のように動詞から派生する名詞化節で表される。ケチュア語の名詞化節は、動詞に名詞化接尾辞-*sqa*などを添加して作られ、一般に「Vされた状態・もの」を表す。

- (12) *chay runa-qa upya-sqa ka-chka-n*
 that man-TOP drink-NMLZ.PST be-PROG-3SG
 ‘That man is drunk’

一方で、状態変化は主に動詞で表されるか、名-形容詞から派生する状態変化派生動詞で表される。アヤクーチョ方言ではある状態を表す名-形容詞語根に接尾辞-*ya*を添加することにより、(13) のように「その状態への変化」を表す動詞語根を生産的に派生することができる。

- (13) *Allimanta-m ayllu-nchik hatun-ya-chka-n*
 slowly-FOC family-1PL.INCL big-BECOME-PROG-3SG
 ‘Slowly our family is getting larger’

本稿では (1) (2) のような動詞または (13) のような状態変化派生動詞で表される状態変化表現を観察対象とし、(9)(10)(11) のような状態表現は扱わない。

3. 自他交替研究概観

3.1. 自他交替の分類

第1節で触れたように、自他交替とは「主に状態変化動詞について、非使役状態変化を表す動詞と使役状態変化を表す動詞の間に形態的対応関係が見られる現象」である。自他交替においては、使役者が追加されるという点で、意味構造が非使役状態変化より複雑であるはずの使役状態変化が、しばしば使役者を含意しない非使役状態変化よりも形態論的に単純な形式で表されることもあるという類似性への逆行が観察される。自他交替はこのような関心に端を発し、動詞の意味構造と形態統語の対応関係を探る上で着目されている。

類型論的研究 (Haspelmath 1993; Nichols et al. 2004; Haspelmath et al. 2014; Haspelmath 2016 など) の関心は、「ある状態変化動詞が、『非使役動詞から使役動詞』と『使役動詞から非使役動詞』のどちらの派生パターンを取るか」を起点としている。そして、ある言語の状態変化動詞全体における派生パターンの傾向や、通言語的にどのような状態変化動詞がどちらの派生パターンを好むかという点に関心が寄せられてきた。このような観点で、系統・地域的に幅広く集めた21の言語から31の非使役・使役動詞対の派生関係を見た Haspelmath (1993) の研究以来、自他交替は幅広い言語で研究が進んでいる。

非使役状態変化動詞と使役状態変化動詞の形態的対応関係は必ずしも「非使役から使役への派生」または「使役から非使役への派生」のいずれかとは限らない。自他交替における代表的

研究の1つである上述の Haspelmath (1993) では、非使役動詞と使役動詞の形態的派生・対応関係を以下の5パターンに分類している。(日本語の例は Haspelmath (1993) の分析に基づく。)

(14) Haspelmath (1993) による自他交替派生パターンのラベリング

使役型 (causative/C)	使役動詞の方がより有標な形態を取る 例： ak-u/ak-er-u
逆使役型 (anticausative/A)	非使役動詞の方がより有標な形態を取る 例： yak-er-u/yak-u
両極型 (equipollent/E)	非使役動詞と使役動詞が対等な形態的有標性を持つ 例： ok-i-ru/ok-os-u
自他両用型 (labile/L)	非使役動詞と使役動詞が同じ形態を取る 例： hirak-u/hirak-u
補充型 (suppletive/S)	非使役動詞と使役動詞で語根が異なる 例： sin-u/koros-u

この5つのパターンは有指向性 (directed) 派生と無指向性 (non-directed) 派生の2つにグループ化される。有指向性派生は派生に一方的な方向性が見られる使役型と逆使役型を指し、無指向性派生は派生の方向性が一方的ではない両極型、自他両用型、補充型を指す。

なお、Nichols et al. (2004) ではこの Haspelmath (1993) による分類をより細分化・拡張し、異なる用語法を用いている。しかし、アヤクーチョ方言においては Nichols et al. (2004) で細分化・追加された分類に相当するペアが観測されないことから、本稿では Haspelmath (1993) の5分類に則って分析する。

3.2. 調査方法

本稿においては、まず3.1節で紹介した Haspelmath (1993) の分類法と調査リストに基づき、アヤクーチョ方言の自他交替パターンの全体的傾向を記述する。その上で心理動詞に着目し、その派生パターンと傾向を明らかにする。具体的な調査項目は(15)の通りである。

(15) Haspelmath (1993) の調査リスト

<1> boil	<11> dissolve	<21> rise/raise
<2> freeze	<12> burn	<22> improve
<3> dry	<13> destroy	<23> rock
<4> wake up	<14> fill	<24> connect
<5> go out/put out	<15> finish	<25> change
<6> sink	<16> begin	<26> gather
<7> learn/teach	<17> spread	<27> open
<8> melt	<18> roll	<28> break
<9> stop	<19> develop	<29> close
<10> turn	<20> get lost/lose	<30> split
		<31> die/kill

データはアヤクーチョ方言の話者 1 名 (40 代女性) からの聞き取り、および話者 3 名 (50 代男女) を対象とした追加調査で収集している。調査は日本国内とアヤクーチョ市現地で行っており、動词语根のみでなく主語・目的語を定めた例文としてデータを収集している。調査で使った主語・目的語については後述する。

4. アヤクーチョ方言の自他交替

以上の研究背景を踏まえ、この節ではアヤクーチョ方言の自他交替における全体的な特徴を Haspelmath (1993) の調査・分析方法に従って記述する。そして、アヤクーチョ方言の自他交替における大きな特徴として、以下の 2 点を示す。まず、アヤクーチョ方言は通言語的に見ても使役型の自他交替パターンを強く好む言語である。さらに、アヤクーチョ方言は Haspelmath (1993; 2016) が主張する「自発性の高い動詞ほど使役型の派生パターンを取る」という傾向に沿う。

4.1. 自他交替パターン概観

Haspelmath (1993) の挙げる 31 動詞対でアヤクーチョ方言の自他交替パターンについてデータを収集し分析した結果が表 1 である⁸。動詞対は Haspelmath (1993: 104) に従い、通し番号が若いほど「自発性の高い」動詞になるようソートしている。さらに、各動詞が表す状態変化を明確にするため、右端の列には状態変化の主体 (非使役動詞の主語、使役状態変化の目的語) を示す。データは各動詞とこの状態変化の主体を用いた一文として収集している。例えば、<1> boil であれば自動詞形は「水が沸いた」、他動詞形は「○○ (人物) が水を沸かした」という一文で聞き取りを行っている。

⁸ 'change' (例文としては「信号の色が変わる」) に相当する動詞はデータが取れなかったため、合計 30 対で計上する。

表1においては有標な形態を取る語根を網掛けで表示している。本稿の調査結果において、使役接尾辞-*chi* または再帰接尾辞-*ku* 以外の形態素を用いた派生は補充型を除き確認されなかった。つまり、アヤクーチヨ方言においては-*chi* または-*ku* を持つ語根が「有標な語根」となる。

表 1. アヤクーチヨ方言における Haspelmath(1993) の 31 動詞対

動詞		自動詞形	他動詞形	型	状態変化の主体
<1>	boil	timpu-	timpu-chi-	C	水
<2>	freeze	rumi-ya-	rumi-ya-chi-	C	水
<3>	dry	chaki-	chaki-chi-	C	服
<4>	wake up	rikcha-	rikcha-chi-	C	人名
<5>	go out/put out	wañu-	wañu-chi-	C	火
<6>	sink	wichi-yku-	wichi-yka ⁹ -chi-	C	石
<7>	learn/teach	yacha-ku-	yacha-chi-	E	人
<8>	melt	chullu-	chullu-chi-	C	氷
<9>	stop	saya-ku-	saya-chi-	E	ボール
		saya-	saya-chi-	C	
<10>	turn	muyu-	muyu-chi-	C	コイン
<11>	dissolve	chullu-	chullu-chi-	C	塩
<12>	burn	kaña-ku-	kaña-	A	家
<13>	destroy	chinka-	chinka-chi-	C	町
<14>	fill	hunta-	hunta-chi-	C	コップ
<15>	finish	tuku-	tuku-chi-	C	祭
<16>	begin	qallari-	qallari-chi-	C	祭
<17>	spread	masta-ku-	masta-	A	布
<18>	roll	tikra-ku-	tikra-	A	ボール
<19>	develop	wichari-	wichari-chi-	C	町
<20>	get lost/lose	chinka-	wischu-	S	鍵
<21>	rise/raise	siqa-ku-	siqa-chi-	E	人
		siqa-	siqa-chi-	C	
<22>	improve	allin-ya-	allin-ya-chi-	C	生活
<23>	rock	kuyu-	kuyu-chi-	C	椅子
<24>	connect	tupa-ku-	tupa-chi-	E	道
		tupa-	tupa-chi-	C	
<25>	change	-	-		信号の色
<26>	gather	huñuna-ku-	huñuna-chi-	E	羊
			huñuna-	A	
<27>	open	kicha-ku-	kicha-	A	ドア
<28>	break	paki-ku-	paki-	A	花瓶
<29>	close	wichqa-ku-	wichqa-	A	ドア
<30>	split	llichki-ku-	llichki-	A	布
<31>	die/kill	wañu-	wañu-chi-	C	人

⁹ 自動詞形と共通する接尾辞-*yku* (「下へ」の移動の方向を主に表す) の音変化であると考えられる。u を末尾に持つ接尾辞は、他の派生接尾辞に先行するとしばしば u > a と音変化する。

以下、各例文と共に派生のパターンを記述する。まず (16) は使役型パターンを取るペアである。

(16) <1> boil: 使役型

- a. yaku timpu-ru-n
water boil-PST-3SG
'The water boiled'
- b. Helme yaku-ta timpu-ra-chi-n
PN water-ACC boil-PST-CAUS-3SG
'Helme boiled the water'

ここでは非使役状態変化が *timpu-*、使役状態変化が *timpu-chi-* で表されている¹⁰。よって、「沸く・沸かす」のペアは使役状態変化の方が有標な形態-*chi* を持つ、使役型の派生パターンと認定できる。このようなペアは (複数パターンペアを認める動詞対もそれぞれのパターンごとに 1 例と見なして) 計 20 例見られる。

一方 (17) は逆使役型のペアである。

(17) <27> open: 逆使役型

- a. punku kicha-ku-ru-n
door open-REFL-PST-3SG
'The door opened'
- b. pay punku-ta kicha-ru-n
3SG door-ACC open-PST-3SG
'(S)he opened the door'

ここでは非使役状態変化が *kicha-ku-*、使役状態変化は *kicha-* で表されている。よって、「開く・開ける」のペアは非使役状態変化の方が有標な形態-*ku* を持つ、逆使役型の派生パターンと認定できる。このようなペアは計 8 例見られる。

アヤクーチョ方言の自他交替は (16) や (17) のように派生に「非使役から使役」または「使役から非使役」の方向性が認められる有指向性派生が大多数 (のべ 35 例中 29 例) である。一方、派生に一方的な方向性の無い無指向性派生の自他交替ペアも少数ではあるが確認される。例えば (18) は無指向性派生の 1 つである両極派生型の例である。

¹⁰ (16) では過去テンスの接尾辞-*ru* (-*ra*) が-*chi* の前に挿入されているが、他のテンス・アスペクト接尾辞は-*chi* に後置される。そのため、-*chi* は他動詞をさらに派生する形態素ではなく、*timpu-chi-* を他動詞語根と見なすのは妥当であると言える。

(18) <7> learn/teach: 両極派生型

a. pay quechua-ta yacha-**ku**-n
 3SG Quechua-ACC know-REFL-3SG
 ‘(S)he learns the Quechua’

b. Rosa pay-man quechua-ta yacha-**chi**-n
 PN 3SG-DAT Quechua-ACC know-CAUS-3SG
 ‘Rosa teach him (her) Quechua’

このペアは同じ形態素 *yacha*-を共有しながら、非使役状態変化には再帰接尾辞 *-ku*、使役状態変化には使役接尾辞 *-chi* が用いられる。つまり、非使役動詞と使役動詞は動詞形態素 *yacha*-に対して対等な有標性を持っている。*-ku* も *-chi* も付かない語根 *yacha*-は (19) のように「知っている」を意味する動詞語根としてのみ用いられ、「学ぶ」または「教える」の意では使われない。

(19) pay quechua-ta yacha-n

3SG Quechua-ACC know-3SG
 ‘(S)he knows (*learns/*teaches) Quechua’

このように、(18) 「学ぶ (learn)」と「教える (teach)」のペアは両極派生型の派生パターンのみを取る。このように両極派生型のみを取る動詞対はごく稀 (1例のみ) であり、多くの両極派生型を取る動詞対は同時に別の派生ペアも認める (5例中4例)。例えば (20) は両極派生型と使役型を同時に認める例である。ここでは、両極派生型にあたる「非使役状態変化 *saya-ku*- (a) と使役状態変化 *saya-chi*- (c)」、使役型にあたる「非使役状態変化 *saya*- (b) と使役状態変化 *saya-chi*- (c)」の2通りのペアが認められる。

(20) <9> stop: 使役-両極派生型

a. *pelota* saya-**ku**-ru-n
 ball stop-PST-3SG
 ‘The ball stopped’

b. *pelota* saya-ru-n
 ball stop-PST-3SG
 ‘The ball stopped’

- c. Rosa *pelota-ta* saya-ra-**chi-n**
 PN ball-ACC stop-PST-CAUS-3SG
 ‘Rosa stopped the ball’

このような例は、自他交替パターンとしては使役型であり、自他交替とは異なる派生プロセスにより表面的には両極派生型も認められるという可能性が考えられる。つまり、非使役状態変化を表すのは無標の語根 *saya-* であり、再帰接尾辞を伴う *saya-ku-* は非使役状態変化に自他交替とは異なる派生を加えたものとも推測し得る。しかし実際には、非使役動詞形における再帰接尾辞-*ku* の有無による意味的な違いはほとんど観察されない。そのため、本稿ではこのような動詞対は「使役型（あるいは逆使役型）と両極派生型が併存する派生パターンを取る」ものと見なす。

以上のように、アヤクーチョ方言の自他交替は、大半が同一語彙素に対する使役接尾辞-*chi* または再帰接尾辞-*ku* の添加によって実現する。ただし、(21) のように非使役状態変化と使役状態変化で形態的対応関係が見られない、つまり異なる語彙素を用いる補充型の例もごくわずかに (1 例) 見られる。

(21) <20> get lost/lose: 補充型

- a. llave *chinka-ru-n*
 key get lost-PST-3SG
 ‘The key got lost’
- b. Helme llave-ta *wischu-ru-n*
 PN key-ACC throw-PST-3SG
 ‘Helme lost the key (lit. ‘Helme threw the key’)

4.2. 自他交替パターンの傾向

以上がアヤクーチョ方言の自他交替の概観である。次に、各交替パターンを取る動詞対の数と割合を計算すると、表 2 の通りになる。なお、複数の派生パターンを同時に認める動詞対、例えば「使役型・両極派生型が併存する動詞対」は使役型 (C) 0.5 対、両極派生型 (E) 0.5 対として計算している。

表 2. 各交替型を取る動詞対の数と割合

交替型	C	A	E	L	S
動詞対の数	18.5	7.5	3	0	1
割合(%)	61.7	25.0	10.0	0.0	3.3
A/C 比	0.41				
無指向(E, L, S)派生の割合	13.3%				

表 2 から動詞対全体の特徴を見ると、アヤクーチョ方言は自他交替の派生関係に方向性が無い無指向型派生（両極派生型、自他両用型、補充型）が稀で、使役型が特に優勢な言語と言える。有指向性派生を取る動詞対は全体の約 9 割（86.7%）を占め、中でも使役型派生は全体の約 6 割（61.7%）に上る。逆に無指向性派生は全体の約 1 割（13.3%）とごく少数である。無指向性派生中でも大きな特徴として、自他両用型の派生ペアが一例も見られない点が挙げられる。つまり、動詞対のリストからも伺えるように自他両用型の割合が非常に高い英語¹¹等と比較して、アヤクーチョ方言は非使役・使役の形態的標示に非常に敏感な言語であると言える。

このデータを元によると、アヤクーチョ方言は通言語的に見ても有指向性派生を好む言語であることがわかる。Haspelmath (1993) が調査した 21 の言語と比較すると、無指向型派生の比率はフィンランド語、モンゴル語、ヘブライ語、トルコ語に次いで 5 番目に小さい (表 3)。

¹¹ 英語の自他両用型自他交替の多さについては Haspelmath (1993: 101) が指摘しているほか、Levin (1993: 25-44) には自他両用型派生にあたる英語の動詞が数多く列挙されている。

表 3. 無指向性派生の割合の通言語的比較 (Haspelmath 1993 を参照)

言語名	無指向性派生の割合 (%)
フィンランド語	9
モンゴル語	10
ヘブライ語	10
トルコ語	12
アヤクーチョ方言	13.3
ルーマニア語	17
アラビア語	18
アルメニア語	21
リトアニア語	24
ウドムルト語	26
ロシア語	26
フランス語	27
スワヒリ語	29
ヒンディー=ウルドゥー語	31
レズギ語	35
ハンガリー語	48
ドイツ語	53
インドネシア語	55
ギリシャ語	56
グルジア語	56
日本語	71
英語	94

さらに、アヤクーチョ方言は使役型派生への指向性も通言語的に見て強い言語であると言える。表2のA/C比(使役型派生ペア数に対する逆使役型派生ペア数の比率)をHaspelmath(1993)が調査した21言語(のうちA/C比を算出している19言語)と比較すると、インドネシア語、モンゴル語に次いで3番目に小さいことがわかる(表4)。

表 4. A/C 比の通言語的比較

言語名	A/C 比
インドネシア語	0.04
モンゴル語	0.27
アヤクーチョ方言	0.40
トルコ語	0.51
ヒンディー=ウルドゥー語	0.54
レズギ語	0.66
ハンガリー語	0.78
ウドムルト語	0.84
フィンランド語	0.88
スワヒリ語	1.00
アルメニア語	1.88
グルジア語	2.00
アラビア語	2.00
ヘブライ語	2.73
リトアニア語	2.92
フランス語	10.25
ルーマニア語	24.00
ギリシャ語	27.00
ドイツ語	29.00
ロシア語	46.00

このように、アヤクーチョ方言は、通言語的に見ても有指向性派生、特に使役型派生が優勢な言語であることがわかる。

4.3. 派生パターンと「自発性」仮説 (Haspelmath 1993)

4.2 節で示したアヤクーチョ方言における自他交替の様相は、Haspelmath (1993) の「事象の自発性 (likelihood of spontaneous vs. caused events)」に基づく説明に良く合致する。Haspelmath (1993) は、ある動詞が使役型をとりやすいか、あるいは逆使役型をとりやすいかという通言語的な指向性を、動詞が表す事象の「自発性」の観点から説明している。そして、ある状態変化が、現実世界において自発的つまり非使役的な事象として起きやすいか、あるいは外因的つまり使役的な事象として起きやすいかという**典型性 (概念的な無標性) が、形態的な無標性にも対応している**と主張している。例えば、「乾く」のような事象は、典型的には外的な力が無くとも起こるため自発性が高く、非使役状態変化が無標となりやすい。逆に「開く」のような事象は、典型的には外的な力 (人間の手) によって起こるため自発性が低く、使役状態変化が無標

となりやすい。

表1の動詞対ごとの自他交替パターンの特徴を見ると、Haspelmath (1993) の言う「より自発性が高く、使役型になりやすい動詞」にはアヤクーチョ方言でも使役型が、「より自発性が低く、逆使役型になりやすい動詞」にはアヤクーチョ方言でも逆使役型が集中している。自発性が高い通し番号 1~6 は全て使役型であり、自発性の低い 26~31 に逆使役型を取る全 7.5 例中 4.5 例が集中している。

このように、アヤクーチョ方言における自他交替の様相はこの Haspelmath (1993) が指摘する「事象の自発性」による通言語的傾向によく沿っている。どのような動詞がどのような自他交替パターンを取り、どのような傾向を見せるかについては歴史的派生関係 (ナロック 2007) や使用頻度 (Haspelmath et al. 2014) など様々な観点で議論されている。事象の自発性を元にした議論には、各動詞の「自発性」の高さを実証的に示すテストが無いという批判はあるものの、アヤクーチョ方言のデータは Haspelmath (1993) の指摘する通言語的傾向の妥当性を示すものであると言える。

5. アヤクーチョ方言の心理動詞と自他交替

前節では、アヤクーチョ方言の自他交替が通言語的に見ても有指向性派生、特に使役型派生を好む傾向にあることを見た。本節では状態変化動詞の中でも心理状態変化動詞 (心理動詞) が、アヤクーチョ方言では特異な両極派生型の派生パターンを取る傾向にあることを示す。そして、この心理動詞の特異性が、心理動詞の特性である「経験者・刺激間の作用の両極性」に起因することを論じる。

5.1. 心理動詞の両極性

心理状態変化は、その事象が「心理状態の経験者 (Experiencer)」を主語とした非使役動詞として表されるか、「心理状態の原因となる刺激 (Stimulus)」を主語とした使役動詞として表されるかのバリエーションが、通言語的に見られる点で注目されている。例えば、「驚く」という心理状態変化は日本語では「太郎は驚いた」のように経験者を主語に取るが、英語では「It surprised me」のように刺激を主語に取る。ある心理状態変化が経験者主語と刺激主語のどちらを取るものとして語彙化される傾向にあるかは言語によって異なり、例えばアツゲウィ語の心理動詞は経験者を主語に取る傾向にある一方、英語は刺激を主語に取る傾向にある (Talmy 2000)。

このような心理動詞の経験者・刺激と項の対応のバリエーションは、異なる言語間のみならず同一の言語内にも見られる。例えば、英語では (3)(4) で見たように、同じく「恐怖」を表す心理状態変化でも、経験者を主語とする動詞 *fear* と刺激を主語とする動詞 *frighten* が存在する。

心理動詞における経験者と刺激の項実現パターンがこのように通言語的にも特定の言語内でも広いバリエーションを見せるのは、心理変化状態における力動性が、双方向に想定され得ることに起因している (Croft 2012)。つまり、経験者がある心理状態に至るためには、「経験者が刺激を知覚する」と「刺激が経験者に作用する」の双方向の作用が考えられるのである。例え

ば「恐怖」の心理状態変化においては経験者が刺激（ホラー映画など）に視覚・聴覚的注意を向けるという「経験者から刺激への作用」と、刺激が経験者に心理的インパクトを与えるという「刺激から経験者への作用」という 2 つの作用が同時に含意される。このことは図 1 のように図示できる。

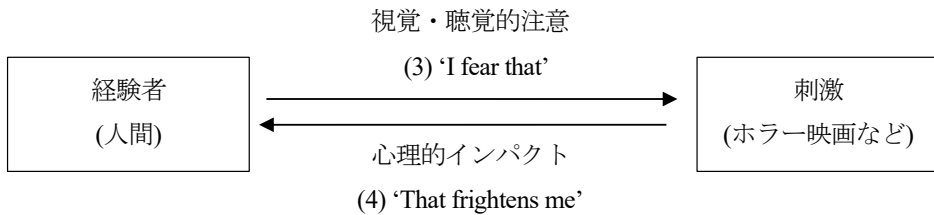


図 1 心理状態変化における作用の両極性

心理状態変化は、このような双方向の作用の中でも「経験者が刺激を知覚する」側面に着目すると、心理状態の変化は経験者の自発的な変化とみなされ、非使役動詞として語彙化される。逆に、「刺激が経験者に作用する」側面に着目すると、心理状態の変化は刺激が引き起こす外因的な変化とみなされ、使役動詞として語彙化される。つまり、*fear* や *rejoice* は「経験者が恐ろしい・喜ばしい刺激を見聞きする」という側面により着目しており、逆に *frighten* や *please* は「刺激が経験者に恐怖や喜びを喚起させる」という側面により着目していると言える。

さらに、心理動詞は、他の状態変化動詞と同様に、非使役心理状態変化と使役心理状態変化で動詞派生の対を為すこともある。例えばスペイン語では、(22) のように再帰代名詞（ここでは *me*）を用いて逆使役化する心理動詞がよく見られる。動詞 *alegrar* は単体では他動詞「喜ばせる」として用いられる (22)a が、再帰代名詞 *se* (人称により変化する) を伴う *alegrarse* は自動詞「喜ぶ」として用いられる (22)b。

(22) a. ella me alegra
 3SG.F.NOM 1SG.ACC please.3SG
 ‘She pleases me’

b. me alegro
 1SG.REFL please.1SG
 ‘I rejoice’ (lit. ‘I please myself’)

心理動詞はこのように、使役性をめぐる意味と統語・形態的実現の対応関係、つまり自他交替において非常に興味深い特性を持っている。心理状態変化は図 1 のように、状態変化の中でも特に非使役性（自発性）と使役性（外因性）の意味が共存している領域であり、どちらに着

目して語彙化するか (英語の *fear* と *frighten*)、どちらの方向性で派生するか (スペイン語の *alegrar* と *alegrarse*) という点で様々なバリエーションが見られる。このような特性を持つ心理動詞に着目して自他交替を記述することにより、ある言語における動詞の意味構造と形態統語的振舞いのインターフェースをより多角的に明らかにできる。

5.2. アヤクーチョ方言の心理動詞

アヤクーチョ方言の心理動詞における自他交替には、5.1 節で見た心理動詞の両極性が形態的にも非常に鮮明に現れていると言える。具体的には、心理動詞には、非使役状態変化と使役状態変化がいずれも共通の語彙素に対して有標な形態で表される両極派生型の自他交替パターンを取るものが、他の状態変化動詞に比べて非常に多く見られる。以下、アヤクーチョ方言の心理動詞における自他交替を具体的に記述する。

アヤクーチョ方言の心理状態変化 (非使役・使役) は、主に表 5 に示す動詞語根で表される。

表 5. アヤクーチョ方言の心理動詞の自他交替

意味	心理動詞(非使役)	心理動詞(使役)	派生パターン
rejoice/please, enjoy/amuse	kusi-ku-	kusi-chi-	E
grief/sadden	llaki-ku-, (llaki- ¹²)	llaki-chi-	E
get angry/annoy, get bored/bore	piña-ku-	piña-chi-	E
fear/frighten	mancha(-ri ¹³)-, mancha(-ri)-ku-	mancha(-ri)-chi-	E, C
addle/confuse	panta-, panta-ku-	panta-chi-	E, C
get tired/tire	pisipa-, pisipa-ku-,	pisipa-chi-	E, C
go mad/drive crazy	loco ¹⁴ -ya-, loco-ya-ku-	loco-ya-chi-	E, C
get stunned/stun	sunsu-ya-	sunsu-ya-chi-	C
get ashamed/ashame	pinqa-ku-	pinqa-	A
envy/make envy, hate/disgust	chiqni-ku-, chiqni-	-	-
like/please	kuya-	-	-

表 5 のように、アヤクーチョ方言の心理動詞は、自他交替において両極派生型のペアを持つ動詞の割合が表 1 の動詞群 (31 例中 5 例、16%) に比べて非常に高い (自他交替ペアのある 9 例

¹² 再帰を伴わない動詞語根 *llaki*-は、これを許容する話者も許容しない話者もいる。

¹³ *-ri* は「起動 (inchoative)」の接尾辞と呼ばれる。「(恐れて) 驚く」の場合はこれを伴う。自他交替の振舞いはこれの有無によって特に変化しないため、以降 *-ri* を含まない *mancha*-に統一して扱う。

¹⁴ スペイン語からの借用。

中 7 例、78%)。例えば (23) は両極派生型のみを認める動詞対の例である。

- (23) a. kusi-ku- 「喜ぶ」
 Maria-qa kusi-ku-ru-n (regalo-wan)
 Maria-TOP happy-REFL-PST-3SG (gift-INST)
 ‘Maria rejoiced (with the gift)’

- b. kusi-chi- 「喜ばせる」¹⁵
 regalo-qa Maria-ta kusi-ra-chi-n
 gift-TOP Maria-ACC happy-PST-CAUS-3SG
 ‘The gift pleased Maria’

このように、心理動詞の中でも代表的な心理状態変化を表す *kusi-* 「喜ぶ/喜ばす」、*piña-* 「怒る/怒らせる」、(さらに個人差はあるが *llaki-* 「悲しむ/悲しませる」) は、両極派生型のペアのみを許容する。つまり、(24) のように使役接尾辞 *-chi* や再帰接尾辞 *-ku* の無い形で定動詞として使うことはできない。例えば語根 *kusi* は、派生接尾辞を伴わない場合、名詞「幸せ」や形容詞「嬉しい」としてのみ用いられる。

- (24) *chay runa-Ø/runa-ta kusi-ru-n.
 that man-NOM/man-ACC happy-PST-3SG
 Intended for: ‘That man rejoiced/something pleased that man’

一方で、両極派生型ペアを持つ動詞対のほとんどは、(25) のように同時に使役型のペアも許容する。4.1 節で見た心理状態変化以外の状態変化と同じように、両極派生型と使役型の両方を認める動詞対において、再帰接尾辞の有無で経験者と刺激の実現パターンが変化することは無い。経験者と刺激の関係以外を見ても、一部の動詞でアスペクト上のわずかな違い¹⁶が推測される他は、意味にほとんど影響を与えないことが多い。

¹⁵ なお刺激を道具格、使役者を主格 (主語) に取ることもできる。

✧ Pedro-qa Maria-ta kusi-ra-chi-n (regalo-wan)
 Pedro-TOP Maria-ACC happy-PST-CAUS-3SG (gift-INST)
 「ペドロはマリアを (贈り物で) 喜ばせた」

¹⁶ 1 人の話者は、*pisipa-* 「疲れる」*mancha-ri-* 「(恐れ) 驚く」が再帰を伴う場合は「次第に」の意味が強調され、*llaki-* 「悲しむ」が再帰を伴う場合は「悲しむ対象 (刺激) が複数であること」を強調すると述べている。ただし、*pisipa-* に関しては再帰の有無によらず *stative* な表現 (*pisipa-sqa* + コピュラ動詞: 「疲れている」) とは明確に区別され、どちらも状態変化を表すようである。また、注 12 の通り *llaki-* に関しては再帰を伴わない語形を許容しない話者も存在する。

(25) a. mancha- 「恐れる」

pay mancha-ru-n (supay-manta)

3SG fear-PST-3SG (demon-ABL)

‘(S)he feared (the demon)’

b. mancha-ku- 「恐れる」

pay mancha-**ku**-ru-n (supay-manta)

3SG fear-REFL-PST-3SG (demon-ABL)

‘(S)he feared (the demon)’

c. mancha-chi- 「脅かす」

chay runa pay-ta mancha-ra-**chi**-n.

that man 3SG-ACC fear-PST-CAUS-3SG

‘That man frightened him (her)’

さらに、形態的には同じ名-形容詞からの派生プロセスを取っていても、心理動詞がその他の状態変化動詞とは異なる自他交替パターンを取る例も観察される。2.2 節で触れたようにアヤクーチョ方言では、名-形容詞語根から「<名-形容詞>の状態になる・する」という意味の動詞を派生する際には、動詞派生接尾辞-ya を用いて派生するのが一般的である。この「語根-ya 型」の動詞は、(26) (27) に示すように心理動詞以外では使役型の自他交替パターンを取る。

(26) a. allin-ya- 「改善する (intr.) 」

kawsay allin-ya-chka-n.

life good-BECOME-PROG-3SG

‘The life is improving’

b. allin-ya-chi- 「改善する (tr.) 」

alcalde kawsay-ta allin-ya-**chi**-chka-n

mayor life-ACC good-BECOME-CAUS-PROG-3SG

‘The mayor is improving the life’

(27) *allin-ya-ku-

*kawsay allin-ya-**ku**-chka-n

life good-BECOME-REFL-PROG-3SG

intended for: ‘The life is improving’

一方心理動詞 *loco-ya-*「狂乱する」は同じく *-ya* によって形容詞から派生した動詞であるが、(28)(29) のように *allin-ya-*と異なり両極派生ペアも認められる。

(28) a. *loco-ya-*

chay runa loco-ya-ru-n.
that man mad-BECOME-PST-3SG
 ‘That man went mad’

b. *loco-ya-ku-*

chay runa loco-ya-ku-ru-n.
that man mad-BECOME-REFL-PST-3SG
 ‘That man went mad’

(29) *loco-ya-chi-*

chay runa-ta loco-ya-ra-chi-n.
that man-ACC mad-BECOME-PST-CAUS-3SG
 ‘Something drove that man mad’

このように、心理動詞の自他交替は、その他の状態変化動詞における自他交替からは特異な振る舞いを見せる傾向にあることがわかる。心理動詞に両極派生型の自他交替パターンが集中することは、5.1 節で述べた心理状態変化における「経験者から刺激へ」（つまり非使役）と「刺激から経験者へ」（つまり使役）の作用の両極性が形式的にも現れていることを示唆する。そこで次節では、心理動詞の語根が持つ特性を記述し、特に代表的な心理動詞は語根が非使役・使役に関して中立的に語彙化していることを示す。そして、心理状態変化における「経験者が刺激に向ける注意」と、「刺激が経験者に与える心理的影響」という2つの作用が共存する両極性が、両極派生型の自他交替パターンに結び付くことを論じる。

5.3. アヤクーチヨ方言における心理動詞の両極性

5.2 節で観察した心理動詞の自他交替における特異性は、5.1 節で述べた心理状態変化における力動性の両極性 (Croft 2006) に起因する。心理状態変化が「経験者から刺激に向ける注意」と「刺激が経験者に与える影響」の両方を同時に含意するために、前者に着目する非使役動詞形は再帰接尾辞 *-ku-*、後者に着目する使役動詞形は使役接尾辞 *-chi* によって双方に標示され得るものと考えられる。

この心理状態変化における作用の両極性は、心理状態変化の中でも代表的な心理状態に関わる「喜ぶ」「悲しむ」「怒る」の語根である名-形容詞が、限定用法、非限定用法を問わず経験者と刺激の両方を修飾できることから観察できる。例えば、(30) は「喜ぶ」の語根が「幸せな・

喜んでいる」として経験者を修飾する例、(31) は「喜ばしい」として刺激を修飾する例である。

(30) a. kusi runa
happy man
'happy man'

b. chay runa-qa kusi-m.
that man-TOP happy-FOC
'That man is happy'

(31) a. kusi taki
happy song
'happy song'

b. chay taki-qa kusi-m.
that song-TOP happy-FOC
'That song is joyful'

さらに (32) のように語根が経験者を修飾する場合、刺激を斜格として表すことはできない。

(32) *chay runa kusi-m regalo-wan.
that man happy-FOC gift-INST
Intended for: 'That man is happy with the gift'

このような特性は *kusi* 「嬉しい、喜ばしい」 のような、心理動詞の中でも代表的な心理状態変化を表す動詞の語根に特有のものであり、*allin* 「良い」 のような「心理状態を表さない名-形容詞」には見られない。仮に「良いと感じる人」を経験者、「良いと感じられる事物」を刺激として想定しても、*allin* がここで言う経験者を修飾することはできない。

(33) a. allin kawsay
good life
'good life (life that makes good impressions)'

b. allin runa
good man
'good man (man that makes good impressions/*man who has good feeling)'

さらに、心理動詞の語根が全てこのように経験者・刺激に中立的な形容詞(名詞を前置修飾する名-形容詞)としての用法を取るとは限らない。例えば(34)(35)のように、*mancha*-「恐れる」や*panta*-「混乱する、惑う」の語根の形容詞用法は許容されない。

(34) a. **mancha* *runa*
fear/frighten man
Intended for: ‘scared man’

b. **chay* *runa-qa* *mancha-m*.
that man-TOP fear/frighten-FOC
Intended for: ‘That man is scared’

(35) a. **mancha* *willay*
fear/frighten story
Intended for: ‘scary story’

b. **chay* *willay-qa* *willay-m*.
that story-TOP fear/frighten-FOC
Intended for: ‘That story is scary’

この他にも *loco-ya*-や *sunsu-ya*-の語根 *loco*「狂った、おかしい(スペイン語からの借用)」や *sunsu*「馬鹿な、無駄な」は辞書には「形容詞」として記載されているものの、実際にこの意味で経験者や刺激を修飾することは無いようである。

このように反例は見られるものの、アヤクーチョ方言の心理動詞が状態変化動詞の中でも特異的にかつほぼ一貫して両極派生型の派生パターンを持つことは、心理動詞の両極性が形態的にも観察できる例として非常に興味深い。(30)(31)のように、心理動詞の中でも特に典型的な心理状態変化を表し、両極派生型のみを認める心理動詞の語根 *kusi*、*piña* が、形容詞としての中立性を見せることは、動詞の両極派生型自他交替パターンという形態的両極性と、図 1 に示す意味的両極性の対応を明確に表していると言える。

6. 結語

本稿ではアヤクーチョ方言の自他交替を主眼として、以下の3つの点を論じた。①アヤクーチョ方言は、通言語的にも有指向性派生、特に使役型の自他交替派生パターンを強く好む。②しかし、アヤクーチョ方言の心理動詞は、①で述べた傾向の中では特異的に両極型派生を取る傾向にある。③そして、このアヤクーチョ方言の心理動詞の特異性は、心理動詞が通言語的に見せる特徴である「経験者・刺激の間の作用の両極性」によるものである。

本稿で明らかにしたアヤクーチョ方言の自他交替の様相は、ケチュア語の動詞形態・意味論的記述をさらに深化させるだけでなく、心理動詞の意味的両極性が形態的両極性としても明確に表れる例として重要なケーススタディとなる。

参考文献

- Croft, William (2012) *Verbs: Aspect and Causal Structure*. Oxford: Oxford University Press.
- Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: Bernard Comrie and Maria Polinsky (eds.) *Causatives and Transitivity*, 87–120. Amsterdam: John Benjamins.
- Haspelmath, Martin (2016) Universals of causative and anticausative verb formation and the spontaneity scale. *Lingua Posnaniensis* 58(2): 33–63.
- Haspelmath, Martin, Andreea Calude, Michael Spagnol, Heiko Narrog, and Elif Bamyaci (2014) Coding causal–noncausal verb alternations: A form–frequency correspondence explanation1. *Journal of Linguistics* 50(3): 587–625.
- Hinostroza Ayala, Aquiles (2000) *Narrativa Picaresca Andina*. Lima: Bendezú S.A.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- ナロックハイコ (2007) 「日本語自他動詞対の類型論的位置づけ」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム』 No. 3, 161–193. 東京: ひつじ書房.
- Nichols, Johanna, David A. Peterson, and Jonathan Barnes (2004) Transitivity and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8(2): 149–211.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Volume 1: Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Zariquiey, Roberto and Gavina Córdova (2008) *Qayna, Kunan, Paqarin. Una Introducción Práctica al Quechua Chanca*. Pontificia Universidad Católica del Perú. San Miguel: Pontificia Universidad Católica del Perú. Estudios Generales Letras.

Causal–Noncausal Verb Alternations in Ayacucho Quechua: With Special Reference to Psych Verbs

Yuko Morokuma
stellstellas@gmail.com

Keywords: Quechua, causal–noncausal verb alternation, psych verb, reflexive, causative, verb semantics, language typology

Abstract

This paper explores causal–noncausal verb alternations in Ayacucho Quechua with special reference to psych verbs. This paper has three major points. First, Ayacucho Quechua shows a great propensity for causative coding. The noncausal member is basic, while the causal member is derived with the causative suffix *-chi*. Second, despite the general preference for causative coding in this language, psych verbs tend to show equipollent coding: the noncausal member is marked with the reflexive suffix *-ku*, and the causal member is derived with *-chi*. Lastly, this coding preference of psych verbs is due to two opposing force–dynamic patterns that psych verbs involve (Croft 2012).

(もろくま・ゆうこ 東京大学言語学研究室)